返り点　補説

――連読符号・レ点・置き字および複雑度をめぐって――

古田島洋介*

何ごとによらず、学生諸君のやることは面白い。すでに拙著『これならわかる返り点――入門から応用まで――[1]』（以下、拙著と略記す）において、現行の返り点の打ち方に関する問題は論じ尽くしたつもりでいたが、なかなかどうして、授業中に返り点を付けさせると、予想外の珍妙な打ち方が続出する。九割以上は原則や用法・規定をわきまえぬ水準の誤りにすぎないが、なかには、やはりこちらの説明不足かと思い知らされるような返り点もなくはない。本稿では、その種の返り点を考察のきっかけとして、拙著の補説としよう。つまらぬ誤りと一蹴せず、また一笑して終わらせず、何をどう説明すれば返り点が正確に打てるようになるのか、その骨法を完璧にせんとの算段である。

一　連読符号（ハイフン）の返り点との同居

返り点の練習にさいしては、差し当たり漢文の意味内容は不問に付し、原文とその書き下し文を示して、書き下し文のごとく読めるよう原文に返り点を付けさせるのが私個人の定法である。ざっと十題くらいの設問を示して、「書き下し文に適合するよう、それぞれの原文に返り点を付けよ」と指示するわけだ。たいていの誤りは、拙著の説明に従えば防げるはずである。ところが、あるとき、次のような返り点を打つ学生が現れた（例文の右肩の＊は、返り点の付け方が誤りであることを表す。以下、同じ）。便宜上、送り仮名をも付けて示せば――

*聞ク㆔鳥ノ啼クヲ㆓梅㆒-樹ニ
＝鳥（とり）の梅樹（ばいじゆ）に啼（な）くを聞（き）く。

一見して誤りとわかる返り点だ。次の例も同様の誤用である。

*如シ㆘揮ツテ㆓快刀ヲ㆒断ツガ㆗乱㆖-麻ヲ
＝快刀（くわいたう）を揮（ふる）つて乱麻（らんま）を断（た）つが如（ごと）し。

これも見たとたんに誤りだとわかるだろう。念のため二例の正しい返り点を示しておけば、左のごとくである。

聞ク㆔鳥ノ啼クヲ㆓梅樹ニ㆒
如シ㆘揮ツテ㆓快刀ヲ㆒断ツガ㆗乱麻ヲ㆖

しかし、正解を示して能事足れりとはゆくまい。学生が付けた返り点でも、書き下し文のように読めるのは事実だからである。「どう見ても

おかしい」だの「こんな返り点の付け方は見たことがない」だのと決めつけてみても、説明にはならない。なぜ「梅-一樹」や「乱-上麻」が誤りで、「梅樹一」や「乱麻上」が正しいのかを、きちんと納得できるよう、合理的に解説せねばならぬ。説明抜きの決めつけ指導が、これまでどれほど漢文嫌いを生んできたことか。

　実のところ、右のような誤りは、拙著六一頁で示した「逐字」の原則で防げる性質のものである。第一例については、「梅樹」という語から「啼」に返るのではなく、「樹」字から「啼」字に返るのだと考えれば、「梅-一樹」のような返り点を打つことはないだろう。第二例に関しても、まったく同じ要領である。「乱麻」という語から「断」に返るのではなく、「麻」字から「断」字に返るのだと考えれば、「乱-上麻」のごとき返り点を打つことはあるまい。

　もっとも、この「字単位の原則」だけでは、学生を納得させせづらいだろう。というのも、学生が「梅-一樹」「乱-上麻」のような返り点を付けたのは、類似の返り点をどこかで見かけた覚えがあるために違いないからだ。実際、こうした連読符号（ハイフン）と返り点との同居現象は、次のような例文に現れる。

不レ知ラ三所-二以裁スル一レ之ヲ
　＝之を裁する所以を知らず。
使下ム人ヲシテ　与二秦ノ吏一行ツテ二県ノ郷邑一ヲ告-中諭セ上之ニ
　＝人をして秦の吏と県の郷邑を行つて之に告諭せしむ。

　それぞれ連読符号と「二一」点または「中」点が同居して「所-二以」「告-中諭」となっている。もう少し繁雑な例では、「丙」点と同居することもあり――

非丁ザル所-丙以ニ励二マシテ　士民一ヲ彰乙ハス君声甲ヲ也
　＝士民を励まして君声を彰はす所以に非ざるなり。

　このように連読符号が返り点と同居した例が記憶にあれば、学生が「梅-一樹」「乱-上麻」のごとき返り点を打っても不思議ではあるまい。事実、それはそれで書き下し文に一致する読みが得られる以上、なおも誤りとするには十分な説得力を持つ理由付けが必要だ。

　右の正しい返り点「所-二以」「告-中諭」「所-丙以」が、学生の誤った返り点「梅-一樹」「乱-上麻」と異なる点は、ただ一つ、連読符号と同居する返り点の性質に係る。正用の場合は「二」点・「中」点・「丙」点との同居であり、誤用の場合は「一」点・「上」点との同居だ。すなわち、連読符号は、大返り（一二点・上下点・甲乙丙点・天地人点）の第二符号以下とは同居できるが、第一符号とは同居できない、との見当がつく。

　むろん、右の諸例に依るかぎり、連読符号は大返りの中継点の符号とのみ同居できる、との考え方も不可能ではない。「所-二以」「告-中諭」「所-丙以」は、それぞれさらに「知三」「使下」「非丁」へと返ってゆく中継点だからだ。しかし、このように規定しようとすると、ただちに次のような反証に出くわすこととなる。

三-二分ス天下一ヲ
　＝天下を三分す。
喪-三失ス其ノ所-二以ヲ為一レス心ト
　＝其の心と為す所以を喪失す。

「三‐二」の「二」点は中継点ではなく終点だが、連読符号が同居している。また、「所‐二以」こそ中継点なものの、やはり「喪‐三失」は終点であり、そこに連読符号が同居している。連読符号の同居の対象を中継点の返り点に限定するのは、事実にそぐわない。

したがって、「連読符号が同居できるのは、大返りの第二符号以下である」と規定するのが正しいだろう。このような規定を設けておけば、「梅‐一樹」「乱‐上麻」などの誤用は防げるはずだ。何もそこまで手間をかけなくとも、との声も挙がるかもしれない。たしかに、返り点の常識をわきまえていれば、「梅‐一樹」「乱‐上麻」のごとき返り点を打つはずはない。しかし、現にそのような返り点を付ける学生がいる以上、すなわち、返り点の常識なるものをもはや当て込むことができない以上、甚だ煩わしいとはいえ、必要な事項は十全に規定しておく必要がある。すでにそのような時代になってしまったのだ。教える立場としては、体系的かつ合理的な説明方法を詳細に整備する好機と考えるしかないだろう。

ただし、右の規定は、連読符号と大返りとの関係に限られる。小返り、つまりレ点との関係についての考察を欠いたまま、おいそれと規定を設けるわけにはゆかぬ。実際、授業中、洵に珍妙な返り点を打った女子学生がいるのだ。それは左のような返り点である。

*不シテレ好マレ犯スコトヲ‐レ上ヲ而好ムレ作スコトヲ　レ乱ヲ

＝上(かみ)を犯(をか)すことを好(この)まずして乱(らん)を作(な)すことを好(この)む。

あまりに珍奇な返り点なので、手もとに記録が残っている。それによれば、くだんの女子学生が右の返り点を付けたのは、平成二十四年七月十二日の漢文学の授業時であった。その学生は、大手の予備校として名高いK塾（我が古巣でもある）で漢文を習ったことがあり、大学センター試験も受けたという経歴の持ち主なので、まったくの不注意による誤謬にすぎまい。けれども、結果として、私は右の返り点の珍妙さに驚くと同時に、大いに感嘆したのでもあった。注目すべきは、もちろん「犯‐レ上」である。レ点と連読符号との同居だ。このような組み合わせは初めて目にしたので、驚くなと言うほうが無理であろう。言うまでもなく、弁解の余地なき誤りで、連読符号は不要、正しくは次のようになる。

不シテレ好マレ犯スコトヲ　レ上ヲ而好ムレ作スコトヲ　レ乱ヲ

しかし、私が感嘆したのは、「犯‐レ上」という返り点が表す無限循環の観念だ。レ点に従って「上」から「犯」に返り、連読符号によって「犯」から「上」に下りる。そして、またレ点に従って「上」から「犯」に返り――いつまで経っても、「犯」と「上」の二字を往ったり来たりするだけだ。無限循環という語が物足りなければ、輪廻転生と称してもよい。このような抽象概念を具現化した「〇‐レ〇」という返り点がありうること自体に感動を覚えたのであった。

もっとも、感嘆したの感動を覚えたのは、私の身勝手な思い入れにすぎず、返り点の付け方としては、単なる誤りである。けれども、この誤用例が一つあれば、連読符号がレ点と同居できないことは明らかだろう。両者が同居するや、果てしない堂々巡りに陥るだけだ。それに気づかせてくれた点で、今なお当の女子学生には深く感謝している。結局、連読符号の同居現象については、次のような規定で臨めばよいだろう。

連続符号（ハイフン）が同居できるのは、大返り（一二点・上下点・甲乙丙点・天地人点）の第二符号以下のみである。

〔付帯事項〕

ⅰ　連続符号は、レ点と同居できない。

ⅱ　連続符号は、大返りの第一符号（一・上・甲・天）とも同居できない。

ここで想い到るのは、右の規定が、レ点に関する大返りとの同居現象に酷似していることだ。私はレ点と他の返り点との同居を「複合返り点」と称しているが、レ点が同居できるのは大返りの第一符号のみ、すなわち、現行の返り点法に依るかぎり、複合返り点は「一レ・上レ・甲レ・天レ」の四種しかない。つまり、レ点は、大返りの第二符号以下とは同居できず、連続符号と同居することもない。要するに、レ点にまつわる同居現象は、右の字句をほとんどそのまま裏返して、次のように記述できるのだ。

レ点が同居できるのは、大返りの第一符号（一・上・甲・天）のみである。

〔付帯事項〕

ⅰ　レ点は、連続符号（ハイフン）と同居できない。

ⅱ　レ点は、大返りの第二符号以下とも同居できない。

なぜ連続符号とレ点の同居規定が互いに裏返しのようになるのかは、容易に見当がつくだろう。「AB」の二字に連続符号を付けて「A-B」とすれば、「A→B」の順序で読むことになり、レ点を打って「A㆑B」とすれば、逆に「B→A」の順序で読むことになるからだ。連続符号とレ点は、相反する機能を持っているのである。だからこそ、両者の規定は、ちょうど裏返しのように記述できるわけだ。さしたる発見でもないが、連続符号と返り点との同居現象が、ちょうどレ点と他の返り点との同居現象の裏返しになることは、承知しておいても決して損にはなるまい。

二　レ点の位置

「AB」の二字にレ点を打って「A㆑B」としたとき、いったいレ点はどこに付いているのか。これについては、すでに拙文[2]でも拙著[3]でも論じた。速やかに結論を述べれば、レ点は下の字の左肩、すなわちBの左上に付いているのである。これは、そのように考えるほうが合理的だという理解の問題ではなく、現にレ点は下の字の左肩に打たれてきたという事実としての問題である。この問題については、本稿を以て最終決着を図るべく、以下、拙文・拙著との重複を厭わずに論点その他を整理しておく。

大返り（一二点・上下点・甲乙丙点・天地人点）の各点が返り読みの起点または終点となる字の左下に付くのは、自明のことだろう。けれども、レ点は起点と終点を同時に表すという特殊な性質を持っているだけに、その位置について問題が生じるのだ。

愛ス㆑人ヲ　＝人（ひと）を愛（あい）す。

右は最も単純なレ点の用例だが、果たしてレ点はどこに付いているの

か。大返りの各点と同じく「愛」の左下か、それとも「人」の左上か、あるいは、そのいずれでもなく、単に「愛」と「人」の中間と考えておくのがよいのだろうか。屁理屈をこねているようで、何やら馬鹿げた気もする。しかし、学ぶ身であればまだしも、教える身としては、決して看過できない問題のはずだ。

一般に、レ点の位置を論じるさいには、複合返り点を持ち出すのが常套手段である。一例として、一点とレ点による複合返り点を挙げてみよう。

為ル二人ノ所ト一レ制スル　＝人の制する所と為る。

御覧のとおり、組み合わせ方は「一レ」となる。他の複合についてもすべて同じで、レ点を下に付けて「上レ」「甲レ」「天レ」とするのが常識であり、「一レ」のごとき組み合わせ方はない。これを説明するのに、レ点は起点となる下の字の左上に付けるものと考えておくのが便利なのである。なぜなら、「一・上・甲・天」などは上の字の左下に付けるのだから、レ点と組み合わせれば、自ずから「一レ」のごとき形になるわけだ。原田種成氏も複合返り点について「レ点が下の字の左肩につけるものであることを知らないと……〈一レ〉の形になることが説明できない(4)」と述べている。

ただし、この説明には弱点が残るだろう。なぜなら、レ点は二字の中間に打つと考えたとしても、「一」が上の字の左下に付いている以上、やはり「一レ」のごとき組み合わせになるからだ。実際、現今の印刷上の体裁から見ても、レ点は二字の中間に付けるものと承知している向きは少なくあるまい。連続した二字を転倒させる符号なのだから、上下いずれの字にも偏ることなく、その中間に打つと考えるほうが、むしろ合理的とも言えるはずである。

ここで想い起こすべきは、往時と現今の行末・行頭におけるレ点の位置の相違である。レ点を要する二字がたまたま行末にさしかかって分割する必要が生じ、上一字を行末に、下一字を次の行頭に記さねばならなくなったとき、レ点をどこに付けるか。これが往時と現今とで異なるのである。先に掲げた「愛スレ人ヲ」を例とすれば、それぞれの体裁は次のようになる。

往時

…………愛ス
レ人ヲ…………

現今

…………愛スレ
人ヲ…………

かつてはレ点を次の行頭に付けていたが、今では行末に配するのがふつうである。そして、一般には、往時の体裁を以てレ点が下の字の左上に付けられる証拠と為し、現今は読みやすさを考慮して行末に付けるようになっただけだと説明する。たしかに、まず「愛す」と読んでから、次行に目を移してレ点に気づき、あわてて「人を愛す」と返り読みしなおすのでは少々不便だろう。一応は納得のゆく説明である。

ところが、これでも、レ点は二字の中間に打つという考え方を排斥できない。曰く「レ点は二字の中間にあるのだから、二字が分割されれば、行末または行頭のいずれかに付けるしかない。たまたま往時は行頭に配していたが、現今は読みやすさを重んじて行末に付けるようになったというだけの話ではないのか？　つまり、往時の体裁は必然の結果ではなく、単なる偶然の結果にすぎないのではないか？」と。こう問われたら、

いささか困る。むろん、反論は可能だ。曰く「往時においても、レ点は行末に置いたほうが読みやすかったはずだ。それを敢えて行頭に印刷していたのは、レ点は下一字の左上に付けるという意識の反映である。それを今は、たまたま読みやすさを重んじて行末に印刷するようになっただけだ」と。しかし、これでは決定打になるまい。理屈のせめぎ合いを招くだけだろう。

　では、どうするか。「レ点は下の字の左上または二字の中間に付ける」との折衷案で妥協し、複合返り点の組み合わせ方についても説明をあきらめ、「複合返り点においては、レ点を下に付けるものとする」との硬い規定を設けて頭ごなしに処理するか。いや、その規定さえ設けておけば、他の返り点と同じく、レ点も上の字の左下に付けると考えたとて、特に支障は生じない。「返り点は一律に字の左下に打つ」となれば、事は単純、甚だすっきりするだろう。

　しかし、やはりレ点は下の字の左上に付けるのである。レ点はどこに位置すると考えればよいのか、という発想そのものが誤りであった。考えるも何もない。事実、かつてレ点は下の字の左上に打っていたのだ。それは、狭い字間に付けられたレ点が、たまたま下方に寄っていたなどという当てにならぬ話ではない。広い字間を残したまま、堂々と下の字の左上に付けてある。これについては、間接的な証拠と直接的な証拠の双方を挙げることが可能だ。間接的な証拠とは、英語に関わる話。直接的な証拠とは、漢文そのものの体裁である。

　明治初期、日本人は英文の各単語に訳語を付け、それを返り点で転倒させて日本語の語順に変換、以て解釈に供していた。学問と言えば、なおも漢文の閲読が優勢であった当時ならではの知恵である。『仮名附 英語階梯』（翰林堂、刊行年不詳［明治四年以後］pp. 15b–16a）の例を挙げてみよう。各訳語に付された発音を示す片仮名は省略する。また、濁音の無表記については、適宜に濁点を打っておく。

若シ　予レ　向ヘバ　レニ　レ東　予ガ　右ノ手ハ　有ル
If　I　face　to　the east　my　right hand　is

レ南デ　而テ　予ガ　左ハ　有ル　レ北デ
the south　and　my　left　is　the north.

レ点に従って返読すれば、「若(も)シ予(わ)レ東(ひがし)ニ向(むか)ヘバ、予(わ)ガ右(みぎ)ノ手(て)ハ南(みなみ)デ有(あ)ル、而(しかうし)テ予(わ)ガ左(ひだり)ハ北(きた)デ有(あ)ル」となり、解釈らしき一文が完成する仕掛けだ。

　むろん、注目すべきは「ニ・東・南デ・北デ」に付けられた四つのレ点である。幸い、大きな字で分かち書きされた英単語に、小さな字で訳語が付されているため、訳語と訳語のあいだに広い空間があり、どこにレ点を付けているかは一目瞭然だ。「ニ・東・南デ・北デ」がそれぞれ返り読みの起点に当たる語であることは明らかだろう。漢文で言えば下の字に相当する。やはりレ点は下の字の左上に付けるという意識だったのだ。事が英文に係るとはいえ、レ点の位置は漢文における意識をそのまま反映していると考えて間違いあるまい。これが間接的な証拠である。

　一方、漢文において、たまたま文章題や詩題がわずか二字から成っているような場合、行内の字配りを整えるために、また、他の文章題や詩題と体裁をそろえるために、二字を引き離し、字間を広くすることがある。もしそこにレ点が打たれていれば、どこにレ点を付けているかが自ずから分明となるわけだ。実際、手もとにある往時の漢文の教科書、すなわち簡野道明［編］『新修漢文入門（新制版）』（昭和十二年）を開い

てみると、左のような実例が目に入ってくる。

敬フレ師ヲ　＝師(し)を敬(うやま)ふ

憫ムレ農ヲ　＝農(のう)を憫(あはれ)む(5)

それぞれ字間に一字分の空格が設けられているので、レ点が下の字「師」および「農」の左肩に付いていることは疑う余地がない。これが直接的な証拠である。

要するに、レ点は下の字の左上に付けると理解しておけばよいという生ぬるい話ではなく、事実、下の字の左肩に付けていたのだ。これで複合返り点の組み合わせ方も安心して説明できるし、かつてレ点が行頭に配されていた理由も判然としよう。現今、レ点を行末に付けるようになったのは、前述のごとく、読みやすさを考慮した便宜上の措置にすぎないのである。(6)

もしレ点を、往時とは異なり、現時においては上の字の左下または二字の中間に打つものと規定するのであれば、それ相応の合理的な変更理由を示さねばなるまい。かかる当然のことを念押しするのは、レ点を打つ位置について、左のような説明が大手を振って罷り通っているからだ。

特に行末にレ点が来た場合、次の行の冒頭に付ける本も見られた。（レ点以外の返り点は、行末の漢字の左下に付けている。）「$\boxed{B}$レ$\boxed{A}$」の場合、BはAから返る符号だから、レ点をBに付けておくのが正しい。(7)

驚嘆すべき解説ではあるまいか。前半はよいとしても、後半の「BはAから返る符号だ」には恐れ入る。いったい「B」は「符号」のつもりなのだろうか。主語「レ点」を省くならば、せめて「AからBに返る符号だ」くらいの日本語は書いてほしいものである。しかも、そうだ「から」という理由で「レ点をBに付けておくのが正しい」とは、いったい如何なる論理によるのか。まったく理解に苦しむ字句である。この伝でゆけば、「AからBに返る符号だから、レ点をAに付けておくのが正しい」と記そうが、「AからBに返る符号だから、レ点をAとBの中間に付けておくのが正しい」と書こうが、何でも許されることになってしまう。もし「いや、真意はそうではない」と弁解するのであれば、漢文訓読の解説とは縁を切り、さっさと政治家、いや政治屋になることを勧めたい。たぶん、町内会長くらいにはなれるだろう。ここまで低水準の説明が野放しになっていることも、漢文教育に現今の惨状をもたらした一因に違いあるまい。

三　置き字の表示

多少とも漢文訓読に慣れれば、訓読文のなかで置き字を見分けるのは容易な業である。置き字として扱われる代表的な字「而・於・于・矣・焉」などに返り点が打ってあれば置き字のはずはなく、また、送り仮名が付いていれば、これまた置き字の可能性はない。発音されない置き字に、発音の順序を示す返り点を打つはずはなく、発音しない以上、送り仮名を付ける理由もないからだ。

ただし、漢文訓読にまったく不慣れな初心者に対して置き字を示さないのは、いささか不都合ではないかと感じるときもある。それは「也」が置き字になっている場合だ。

「而・於・于・焉」は、置き字でなければ、まず間違いなく「而（しかシテ）・而（しかモ）」「於（おイテ）」「于（おイテ）」「焉（いづクンゾ）・焉（ここニ）・焉（これヲ）」などの送り仮名が付いてくるので、置き字か否かは判別しやすい。「矣」については、大部分が置き字として扱われ、置き字でない場合のほうがはるかに少ないので、もし読むのであれば、たとえ送り仮名を付けずとも、「矣（かな）」と読み仮名を付けたり、あるいは注で〈かな〉と読み、感嘆を表す」くらいの説明を加えたり、何らかの措置をほどこすのが一般だろう。

ところが、「也」は、日本語でも送り仮名ナシに「なり」と訓ずる習慣が成り立っているためか、実は置き字であることに想い到らず、機械的に「也（なり）」と読んでしまう学生が意外に多い。この誤読現象に気づいた具体例は、次の一文である。

未（ダシ）也。

この二字は、『論語』季氏や『荘子』達生、または〔唐〕李復言『続玄怪録』の「定婚店」などに見え、放置しておくと、ゆめにも「也」が置き字だとは思わず、誤って「未（いま）だしなり」と訓読する学生が後を絶たない。もちろん、漢文訓読で「未だしなり」という言い回しが成立しないことは明らかである。なぜなら、訓読における「なり」は、断定の助動詞「なり」に限られ、よほど特殊な場合を除き、伝聞・推定の助動詞「なり」は使わないからだ。[8] 断定「なり」は連体形に付き、伝聞・推定「なり」は終止形に接続する。したがって、「未だしなり」のごとく、形容詞「いまだし」の終止形に「なり」を付けると、伝聞・推定「なり」になってしまうので、訓読の習慣に合わないこととなる。とはいえ、昨今は二種の「なり」を覚えるための名高い便法、すなわち『土佐日記』の冒頭「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」の暗記を強いることが少なくなったためか、あるいは、もはや文語文法をろくに教えなくなったためか、二種の「なり」の区別さえ甚だ怪しく、ましてや漢文訓読となると文語文法の意識が稀薄化してしまうのか、二つの「なり」の接続の相違を説明しても、教室内に「あっ、そうだった」と納得する雰囲気がまるで感じられなくなっている。たとえ説明を重ねても、たまたま欠席した学生や、文語文法に無頓着な学生は、相変わらず身勝手に「未だしなり」と読んで平然としているのが実情だ。むろん、正しくは、形容詞「いまだし」の連体形に断定「なり」を付けて、「未だしきなり」と訓じなければいけないのだが。

こうした初心者の誤りを防ぐには、置き字に何らかの符号を付けて、置き字ゆえに発音しないことを明示するのが親切かと思う。その種の措置を講じておけば、身勝手な思い込みによる訓読も野放しにはならないだろう。実際、この数年、私は授業の板書などにおいて、置き字扱いされていることを示すべく、当該の置き字の左傍に次のごとく符号を付けることにしている。符号は「φ（ファイ）」、数学で空集合を表す記号だ。左傍に付けておけば、送り仮名と紛れる心配はないだろう。「也」を置き字とした場合と、置き字にせず、そのまま「なり」と訓じた場合の両者を並べておけば——

未（ダシ）也（φ）。　＝未だし。　＊「也」は置き字。

未（ダシキ）也。　＝未だしきなり。

ここまで面倒を見るのは煩わしすぎるとの意見もあるだろう。しかし、再読文字の再読（左の読み）を片仮名で振る方式が一部の参考書に見ら

れる以上、やはり誤読を防ぐべく、置き字についても何らかの措置がほどこされて不思議ではあるまい。単なる初心者向けの符号付けとはいえ、知らぬ間に誤読を犯さないためには、それなりに有効な措置だと考える。符号そのものが絶対に「φ（ファイ）」でなければいけない必然性はなく、わかりやすい符号でありさえすれば、その他の符号でも差し支えないが。今、一案として茲に記しておく。

「也」を「なり」と訓ずるか「や」と読むかの問題は、置き字か否かが判別できてからの話であろう。言うまでもなく、「（ナリ）也」「（ヤ）也」のように送り仮名を付け、「也」字を直接には読まない訓法を採るのであれば、それだけ置き字が増加するため、ますます初心者に対して置き字を明示する必要性が高まるものと考える。

ちなみに、右の例に見える「未」が再読文字でないことは、返り点が付いていないがゆえに、速やかに判断できる。もし再読文字であれば、再読（左の読み）「ず」に返らねばならぬ関係上、必ず返り点を打つことになるからだ。

四　返り点の複雑度1——問題の所在

返り点の複雑度は、どう測ればよいのか。何やら珍奇な問題のようだが、なかなか実用性のある話柄である。というのも、一見、二種の返り点を付けることが可能な文については、たいていの場合、返り点の複雑度の低いほうが正解だからだ。たとえば、次のような一文である（早速ながら、置き字「於」の左傍に符号「φ」を付けてみる）。

孔子問礼於老子

【正】孔子問（フ）二礼（ヲ）於（φ）老子（ニ）一
＝孔子（こうし） 礼（れい）を老子（らうし）に問（と）ふ。

【誤】孔子問（フ）レ礼（ヲ）二於（φ）老子（ニ）一
＝孔子（こうし） 老子（らうし）に礼（れい）を問（と）ふ。

漢文訓読に馴染んでいれば、ただちに正誤が判定できるに違いない。しかし、書き下し文を提示することなく、白文のまま学生たちに返り点を付けさせると、大半が【誤】のように返り点を打つ。たぶん、【誤】「孔子 老子に礼を問ふ」のほうが、日本語として滑らかに響き、下から「老子→礼→問」と返ってゆくさまが、いかにも漢文らしく見えるからであろう。それに引き換え、【正】「孔子 礼を老子に問ふ」は、わずかながら口調が滑らかさに欠け、返り点が少ない分だけ何となく見劣りするというわけだ。

実のところ、【正】の正解たるゆえんを説明するには、漢文訓読の根本原理に関する解説が必要だ。私見によれば、それは漢文訓読が本質として有する〈記憶術〉としての原理であり、そこから「できるかぎり原文の語順のままに訓読する」という原則が立ち現れ、さらにその結果として「一般に、返り点はなるべく少なめに打つ」という規則が出てくるわけである。これが拙著にいう「返り点は簡略を旨とすべし」だ(9)。

ただし、右のような例に出くわすたびに根本原理から話を始めるわけにはゆかず、また、原理に関する話なしには原則を納得のゆくように説明することはできない。したがって、実際に返り点を付ける場面では、単なる規則として「一般に、返り点はなるべく少なめに打つ」を示し、【誤】に比べれば【正】のほうが返り点が簡略なので正解だ、と解説するのが効率的なのである。

この問題は、右のごとく説明の段取りが厄介なためか、まったく言及していない書物が多く、たとえ言及していても、たとえば東京都高等学校漢文教育研究会［編］『漢文提要』のように、「我与(フ)二書(ヲ)於友人(ニ)一」や「我与(フ)二彼(ニ)書(ヲ)一」を正しい訓読として示しながらも、単に「この場合〈我与(フ)レ書(ヲ)二於友人(ニ)一〉とは読まない」「この場合〈我与(フ)レ彼(ニ)レ書(ヲ)〉とは読まない」と記しているだけだ。(10) これでは高校生たちも納得できまい。せめて「返り点は、できるかぎり簡略に付ける」くらいの字句は必要だろう。それに比べると、たとえば中野清『中野式　漢文なるほど上達法』のほうが親切だ。同書は、「我飲(ム)二上海(ノ)酒(ヲ)一」はよいが、「我飲(ム)三上(ノ)二海酒(ヲ)一」は「ダメである。なぜなら、返り点が複雑になるから。」と明確に記している。もっとも、その理由付けは甚だ疑問で、日本語は語順の自由が利く言語であるから、「〈上海に酒を我は飲む〉でも〈酒を我は上海に飲む〉でも、日本語としてはおかしくない。だから、返り点のいちばん単純なものだけを正解にするしかないのである」と説明するにとどまる。(11) 私には、この一節の「だから」の前後がどのような論理関係によってつながるのか、どうにも理解できない。「日本語としてはおかしくない」のであれば、「どのように返り点を打っても正解と認めるしかない」との結論に落ち着くのが自然ではなかろうか。それを敢えて「返り点のいちばん単純なものだけを正解にするしかない」と結論づける理由が皆目わからないのである。

しかも、右の諸例であれば、正解よりも不正解のほうが、いかにも返り点が複雑そうに見えるからよいものの、どちらが複雑と言えるのか、いささか微妙な場面が出てきたら、どのようにして複雑さを示せばよいのだろうか。それなりの説明原理なしにすませるわけにはゆくまい。強引に「どう見ても、こちらの返り点のほうが複雑ですから」と決めつけて、正解を――教える身としては、もともと正解がわかっているわけだ――絞ってみせるのでは、教わる側から見れば独り善がりもよいところ、何のための説明かわからなくなってしまう。だれが見ても納得するような返り点の複雑度の測定法が必要だ。実のところ、拙著で「与(フ)二王(ニ)書(ヲ)一」を正解、「与(フ)レ王(ニ)レ書(ヲ)」を誤りとし、些少の理由付けに基づいて、「前者のほうが返り点が簡略で、後者の返り点は複雑だと見なせます」と説明したときも、(12) 不安が脳裡を過ぎっていたのである。単純に返り点の個数だけを数えれば、どちらも二つなのだから。今、それを改めて考察しようというわけだ。右の数種の例文を要せば、次の二種の構文について訓読の語順を確定すべく、返り点の複雑度の測定法を案出し、複雑度の低いほうを正解だと説明できるようにすることが眼目となる。

動詞＋間接目的語＋直接目的語

【正】〔動詞〕(ス)二〔間接目的語〕(ニ)〔直接目的語〕(ヲ)一

　＝間接目的語→直接目的語→動詞

【誤】〔動詞〕(ス)レ〔間接目的語〕(ニ)レ〔直接目的語〕(ヲ)

　＝直接目的語→間接目的語→動詞

動詞＋目的語＋副詞句

【正】〔動詞〕(ス)二〔目的語〕(ヲ)〔副詞句〕(ニ)一

　＝目的語→副詞句→動詞

【誤】〔動詞〕(ス)レ〔目的語〕(ヲ)レ〔副詞句〕(ニ)

　＝副詞句→目的語→動詞

以下、節を改めて、返り点の複雑度の測定法および複雑度の大小の判別法を考察してみよう。

五　返り点の複雑度2——測定法・判別法の考察

測定法を考察するに当たり、まずは二つの基本方針を掲げておく。

一　複雑度の計算が容易で、客観的に数値化できること。

二　数値化された複雑度が、返り点に従って訓読するさいの実感に適うこと。

いずれも納得してもらえる基本方針だろう。複雑度の計算が煩雑では実用性を欠くうえ、数値化することなく、「こちらのほうが複雑なはずです」では、何のための測定法なのか、わけがわからなくなってしまう。また、いざ数値化したものの、それが訓読するときの実感と大きく懸け離れていたのでは、測定法そのものの信頼性が疑われるからだ。

　あらかじめ返り点の組織も確認しておく。肝腎な要素を取りこぼしていては、最悪の場合、また初めから考察し直す必要に迫られるからだ。

┌小返り＝レ点
└大返り＝一二点・上中下点・甲乙点・天地人点
　＊補助符号＝連読符号(ハイフン)

　符号の数を確認しておけば、レ点は「レ」一つのみ。一二点は「一、二、三……」であるから、理論的には無限大∞まで続く自然数の集合、つまり無限大に発散する数列である。上中下点は「上・中・下」の三つ、甲乙点は「甲・乙・丙・丁……」の十干(13)すなわち十個、そして天地人点が「天・地・人」の三つである。

　さて、最初に公理のごときものを考えてみよう。返り点の複雑度を問題としている以上、次の公理は、たぶん異論なく認めてもらえるだろう。

　　返り点が一つもない文は、返り点の複雑度を0(ゼロ)とする。〔公理1〕

たとえば、「孔子(こうし)は聖人(せいじん)なり」である。この一文は、左掲のように四種の原文を想定することができる。相当する漢文「A者B也」の「者」と「也」の有無によって、種々の変形が利くためだ。

・孔子者(は)聖人也　＊「孔子(ハ)者(φ)聖人(ナリ)也(φ)」とするも可。
・孔子者(は)聖人(ナリ)　＊「孔子(ハ)者(φ)聖人(ナリ)」とするも可。
・孔子(ハ)聖人也　＊「孔子(ハ)聖人(ナリ)也(φ)」とするも可。
・孔子(ハ)聖人(ナリ)

しかし、右の四例のいずれにも返り点は見当たらない。それぞれ視覚上の負担は微妙に異なるかもしれないが、返り点の複雑さに対する影響は皆無である。すべて返り点の複雑度は0(ゼロ)と見なしてよいだろう。

　ここから一つの重要な結果が導かれる。それは——

　　返り点の複雑度は、0(ゼロ)または正(プラス)の値を取る。〔公理2〕

ということだ。返り点の複雑度について、負(マイナス)の値を想定する必要はあるまい。一つも返り点がない右のような例よりもさらに返り点が簡略な

訓読文はあり得ないからである。これも異論なく認めてもらえるだろう。

では、いざ返り点の複雑度を測定するとなれば、どのように考えるべきか。最も容易なのは、単純に返り点の個数を数え、その多寡を以て複雑度とする方法である。前掲の例を挙げれば——

【正】孔子問フ㆓礼ヲ於老子ニ㆒

【誤】孔子問フ㆑礼ヲ㆓於老子ニ㆒

返り点を数えれば、【正】は「一」「二」の二つ、【誤】は「一」「二」「レ」の三つ。したがって、【正】のほうが【誤】よりも返り点の複雑度が低く、それゆえに【正】と判定できるわけだ。やはり前に掲げた次の例についても、まったく同様である。

【正】我与フ㆓書ヲ於友人ニ㆒　↓返り点は二つ。　↓複雑度が低い。

【誤】我与フ㆑書ヲ㆓於友人ニ㆒　↓返り点は三つ。　↓複雑度が高い。

もっとも、これで事が解決するならば、だれも苦労しまい。わざわざ本稿を綴るまでもないことだ。問題となるのは、左のような前掲の例である。

【正】我与フ㆓彼ニ書ヲ㆒

【誤】我与フ㆑彼ニ㆑書ヲ

【正】与フ㆓王ニ書ヲ㆒

【誤】与フ㆑王ニ㆑書ヲ

それぞれ返り点は二つ。「一」と「二」の二つだろうが、「レ」が連用されて二つになろうが、どのみち個数は同じとなれば、返り点の多寡を以て正誤を判定することはできない。単純に返り点の個数を数えるだけでは、たちどころに説明が破綻するわけだ。

ここで考えてみるべきは、レ点の特殊性である。すでに拙著にも記した[14]が、レ点を「小返り」、一二点・上下点……を「大返り」と名づけるのは、単に返る距離の大小に着目しての呼称ではない。そもそもレ点だけは、他の返り点と性質が異なるからなのである。最も単純なレ点の例として、これまた前掲の例を挙げてみると——

愛ス㆑人ヲ

もし敢えて大返りを用いて同じ返り方を示すとなれば、当然、次のようになる。

*愛ス㆓人ヲ㆒

一目瞭然、レ点であれば一つで済むところを、一二点で返るとなれば二つの符号が必要となる。つまり、レ点は一つで起点「人」と終点「愛」を示すことができるのに対し、一二点は起点「人」と終点「愛」のそれぞれに符号を付けなければならない。この一二点の性質は、他の大返り、すなわち上下点・甲乙点……についても当てはまる。これこそが返り点を小返りと大返りとに分かつ本質的な理由にほかならない。両者は符号としての機能が異なるのだ。起点と終点に注目するかぎり、次

の二つの返り点は等価と見なさねばならないだろう。それぞれ起点「B」から終点「A」に返る点では、まったく同じ指示のはずだからである。これを等価原理の第一としておきたい。

A㆑B＝A㆓○B㆒　〔等価原理１〕

右を返り点の個数という観点から見直せば、「A㆑B」は「レ」が一つ、「A㆓○B㆒」は「一」と「二」の二つである。それを等価と見なすからには、レ点の値を二倍にして計算せねばならぬだろう。要するに、返り点そのものの個数ではなく、返り点が指示する起点と終点の個数を数える作業となる。今、レ点の数をｒ（〈reten〉とし、一二点の数をＲ（〈return marks「返り点」の直訳）と置けば、次のように複雑度Ｋ（〈kaeriten〉を算出することになろう。

K＝2r＋R　〔計算式・第一案〕

改めて右の〔等価原理１〕の両辺について複雑度の計算式を示せば、次のとおり。

A㆑B　　r＝1, R＝0　→K＝2×1＋0＝2
A㆓○B㆒　r＝0, R＝2　→K＝2×0＋2＝2

両者が等価であることを数値で表せる。ただし、こうした単純な場合についてだけ考えてみても、実りは少ない。種々の返り点に関しても計算式が広く通用するよう、三つの論点を用意して考察を重ねてみよう。

第一は、大返りが少なからぬ字数を差し挟んで用いられた場合である。次の二つの例を見比べてほしい。

・○㆓○○㆒
・○㆓○○○○○○○○㆒

いずれの返り点も「一」点と「二」点のみだが、挟まれた字数は二字と八字。「一」点から「二」点への視線の移動距離に六字分もの差がある。この種の相違は、どう考えればよいのだろうか。字数の差異を複雑度の計算に入れるべきか否か。

思うに、このような返り点間の字数をも返り点の複雑度に算入するのは、おそらく多大な不都合をもたらすだろう。返り点の機能それ自体には何ら相違がないうえ、文章に出逢うたびに返り点のあいだの字数を数えていたのでは、作業が繁雑になって仕方ない。しかも、視線の移動距離をも数値化して計算に加えるとなれば、ただちに左のような厄介な場合が予想されるだろう。

・○㆓○○㆑○
・○㆓○○○○○○○○㆒

前者は「一」点と「二」点に「レ」点が組み合わさっているが、後者はやはり「一」点と「二」点のみ。返り点としては、明らかに前者のほうが複雑な印象だろう。けれども、右に掲げた二例と同じく、「一」点と「二」点に挟まれた字数は二字と八字で、六字分もの大差がある。この六字分の差をも計算に入れるとなれば、当然、「レ」点が組み合わさ

ったことによる複雑度の増加を下回るように数値化せざるを得ないだろう。もし「レ」点一つによる増加分が〈2〉であれば、六字分の差をそれより小さく見積もる以上、一字分で〈0.3〉くらいか。しかし、もし字数の差が七字に及べば、〈0.3×7＝2.1＞2〉となり、返り点の単純な文のほうが返り点の複雑な文を複雑度で上回るという珍妙な計算結果になってしまう。返り点間の字数すなわち視線の移動距離は、やはり返り点の複雑度に算入しないものと規定しておくのが得策に違いない。詰まるところ、前掲の二例は等価と見なすこととなる。これが等価原理の第二だ。

○二○○一＝○二○○○○○○○○一　〈等価原理2〉

言うまでもなく、〈計算式・第一案〉によれば、両辺とも〈r＝0，R＝2〉であるから、等しく〈K＝2〉となる。

第二は、大返りが三つ以上に及び、中継点が生ずる場合である。左のような返り点については、どのように複雑度を計算すべきか。

○三○○二○○一

〈計算式・第一案〉に則れば、〈r＝0，R＝3〉であるから、〈K＝3〉となる。けれども、〈計算式・第一案〉の前提は、大返りの「一」点が起点、「二」点が終点という単純そのものの機能であった。ところが、右の例は然らず。「一」点が起点であることに変わりはないが、「二」点が「一」点に対して終点であると同時に、「三」点に対しては起点の役割を果たしている。これが「二」点の中継点たるゆえんだ。「三」点が単なる終点であることは事実だが。レ点に対して、起点と終点を同時に表すがゆえに、二倍の値を与えた以上、この中継点たる「二」点についても、同様の数値化を考えねばなるまい。起点と終点を兼ねるという点において、中継点はレ点と同一の性質を持っているからである。

では、どうするか。「三」点にとどまらず、「四、五……」と伸びていった場合をも考慮し、R個の大返りが用いられたと仮定して、計算式を一般化する必要があるだろう。「三」点までにしか通用しない計算式では役に立たず、むろん、「一」点と「二」点のみの場合にも適用可能な計算方法が求められる。

按ずるに、ここで次のごとき計算式を立てれば、大返りの複雑度を一般化して算出できるのではないか。すなわち、大返りの返り点の数がR個だとすれば、起点のみを示す「一」点と、終点のみを示す「R」点の二つを除いた残りが中継点となり、中継点それぞれが起点と終点の役割を同時に果たすはずであるから、起点と終点の合計数は――

$$2+2(R-2)=2R-2=2(R-1)$$

これを〈計算式・第一案〉のレ点項〈2r〉と結合すれば、次のごとくである。

$$K=2r+2(R-1)$$　〈計算式・第二案〉

右によって、レ点と一二点が現れる訓読文の複雑度は計算できる。ただし、この計算式が不都合なのは、まったく返り点がない訓読文の複雑度を0(ゼロ)とする公理、すなわち〈r＝0〉かつ〈R＝0〉のときに〈K＝0〉

とならず、〈K＝−2〉となってしまう点だ。これを防ぐには、レ点項〈2r〉はそのままにしておくとして、一二点に関わる〈2（R−1）〉の項をRの乗算に変形したい。そうすれば、〈R＝0〉のとき、〈R×？＝0〉となるはずだからである。ところが、〈2（R−1）〉をRの乗算に変形すると――

$$K=2r+2R\left(1-\frac{1}{R}\right)$$　〔計算式・第二案（変形）〕

これでは、〈R＝0〉のとき、分母に0（ゼロ）が入ってしまい、数式として成立しないこととなる。どうやら、まったく返り点がない訓読文の複雑度が0（ゼロ）になる場合と、一二点が付いた場合とは、異なる条件付けで区別するしかなさそうだ。同じく返り点である以上、レ点についても、一二点と同じ条件付けで処理するのが自然だろう。結局、次のように条件を付けて、〔計算式・第二案〕のまま基礎固めをしておくのが賢明かと思う。

$$K=2r+2(R-1)$$　〔計算式・第二案（再掲）〕

＊〈r＝0〉または〈R＝0〉のとき、レ点項〈2r〉および一二点項〈2（R−1）〉は、それぞれ計算の対象とせず、ただちに当該項の値を0（ゼロ）とする。

大返りの上中下点・甲乙点・天地人点は、一二点と同じ性質を有する返り点であるから、いずれも一二点項〈2（R−1）〉に準じて考えればよかろう。改めて一二点の個数を〈R_1〉とし、上中下点の数を〈R_2〉、甲乙点の数を〈R_3〉、そして天地人点の数を〈R_4〉と置けば、返り点の複雑度は次のようにして算出できるはずだ。

K＝	2r	＋2（R_1−1）	＋2（R_2−1）	＋2（R_3−1）	＋2（R_4−1）
	レ点項	一二点項	上下点項	甲乙点項	天地人点項

〔計算式・第三案〕

＊〈r＝0〉または〈R_n＝0〉のとき、レ点項〈2r〉および一二点項以下の〈2（R_n−1）〉は、それぞれ計算の対象とせず、ただちに当該項の値を0（ゼロ）とする。

第三は、大返りが特殊な方式で用いられる場合である。一般には、下から「一→二→三」と順に進んでゆく大返りが、稀とはいえ、左のように上から「二→三」と進む例もあるから厄介だ。連読符号については後述するので、今は一二点だけに注目することとしよう。

三㆓‐令五㆔‐申之㆒
＝之（これ）に三令五申（さんれいごしん）す。

按ずるに、これについても下から「一→二→三」と上昇してゆく一般の用法と同一の計算方法を採りたい。「一」点が起点、「二」点が「一」点からの終点と「三」点への起点を兼ねた中継点、そして「三」点が終点であることは、まったく変わりがないからだ。すなわち、「三…二…一」と「二…三…一」は等価と見なすわけである。これが等価原理の第三だ。

〇㆓‐〇〇㆔‐〇〇㆒＝〇㆔〇〇㆓〇〇㆒　〔等価原理3〕

以上により、返り点すなわち小返りと大返りに関する複雑度は、あらかた計算できるはずである。残る問題は、返り点の補助符号たる連読符号をどのように扱うかだ。

まず確認しておくべきは、二種の連読符号が存在するという事実である。第一種は、文字どおり補助符号の役割を持ち、訓読の順序を指示する機能を果たす連読符号だ。最も簡略な例を挙げれば――

三㆓-省吾身㆒
＝吾が身を三省す。

この種の連読符号は、訓読の順序を指示するのに必須の符号である。かつては連読符号を省いて「三㆓省吾身㆒」のように訓読文を呈示することも少なくなかったが、これでは、誤って「省→吾→身→三」と読み進めてしまうのが当然だ。この種の連読符号を省略するのは、不正確かつ不親切きわまりない態度である。訓読の順序を指示する補助符号としての連読符号は、絶対に省略してはならない。以下、この種の連読符号は省かぬことを前提として話を進める。

それに対して、第二種は、読みの順序とは無関係な連読符号、つまり連語であることに注意を促すだけの連読符号である。たとえば、次のような例だ。

今-者　昔-者　所-謂　以-為　聞-説

この種の連読符号を付けるか否かは、一に訓読者の裁量による。省略に従い、それぞれ「今者・昔者・所謂・以為・聞説」としても、何ら訓読の順序には関係しない。まったく任意の連読符号だ。

では、返り点の複雑度の計算において、連読符号をどう扱うか。第二種の連読符号を複雑度に算入しないことについては、何も異論があるまい。取り立てて読みの順序を指示する機能がない以上、返り点とは何の関係もないからだ。問題となるのは、第一種の連読符号である。連読符号が上から下へと読み進めるための符号である以上、下から上へと返るよう指示する返り点とは、まったく異なる性質と考えてよい。その点で、連読符号を返り点の複雑度に組み入れるのは憚られる。

しかし、本質上は無関係だとしても、実際上はどうだろうか。つまり、実感として、連読符号はまったく無視しても複雑度に影響しないのだろうか。右に挙げた例文を再び引き、併せてその変形を並べて示してみよう。

・三㆓-省吾身㆒
・三　省㆓吾身㆒

第一例は単なる再掲だが、第二例は異なる訓法を用いた訓読で、「三省」を熟語として扱わず、副詞「三」と動詞「省」とにばらして読んでいる。いずれの返り点も「一」点と「二」点の二つのみだが、連読符号の有無に関わる分だけ、複雑度の印象が異なるのではなかろうか。さらには、次の例も見比べていただきたい。

・奴㆓-虜-使之㆒　＝之を奴虜使す。
・奴虜使㆑之　＝奴虜として［奴虜のごとく］之を使ふ。

これも同一の文について、二つの異なる訓法を並置したものである。返り点は、前者が「一」点と「二」点、後者が「レ」点。すなわち、前掲の〔等価原理1〕により、返り点そのものは等価と見なせるが、全体として両者はまったく等価と言えるだろうか。やはり、連読符号が運用されている分だけ前者のほうが複雑に見える、というのが実感ではないか。

本質的には返り点と無関係、ただし、実感としては複雑度に関係するとなれば、扱い方はただ一つ、返り点とは別枠で連読符号を複雑度に算入するしかない。連読符号による複雑度は、本質的には返り点と無関係であり、いわば見かけの複雑度にすぎないからだ。両者は別物なのである。そこで、最も簡便な方法によって両者を仕分けるべく、連読符号の数をmとして、それにh（〈hyphen〉）を添え、前掲の〔計算式・第三案〕の右辺をK（〈Kaeriten〉）と置いた式に付け加えて、複雑度C（〈complexity〉）を概念形に仕立てれば——

C＝K＋mh　〔計算式・第四案（概念形）〕

むろん、連読符号が一つもない〈m＝0〉のとき、連読符号項〈mh〉は計算式から消えることになる。

この〈C＝K＋mh〉が何を意味するかは、すでに分明だろう。一見して連想されるように、返り点の複雑度は、あたかも複素数のごとく扱えばよいのである。すなわち、複素数で言えば、〈K〉が実数部、〈m〉が虚数部に当たり、〈h〉は虚数単位〈i〉に相当する。このように比定しておけば、複素数が実数軸と虚数軸による複素平面（いわゆるガウス平面）に視覚化できるのと同じく、返り点の複雑度も返り点軸と連読符号軸による返り点平面（と仮に命名しておく）に視覚化できるはずだ（むろん、複素数のごとく扱うとはいえ、単に形式上の話にすぎず、すぐ左に記すように、複素数とは異なり、大小関係を考えるわけであるが）。

ここで肝腎なのは、右の〔計算式・第四案〕で書き表される〈C＝K＋mh〉の大小関係である。連読符号による複雑度が、本質的には返り点と無関係であり、見かけの複雑度にすぎない以上、まずは〈K〉の値によって大小が確定されねばならない。もし〈K〉の値が互いに等しければ、当然、連読符号の多いほうが、すなわち〈m〉の値が大きいほうが見かけの複雑度も高くなる。これを要すれば——

同一の文について、二種の返り点の複雑度が〈$C_1＝K_1＋m_1h$〉および〈$C_2＝K_2＋m_2h$〉と書き表されるとき、〈m_1〉および〈m_2〉の値に拘わらず、

$K_1>K_2$ ならば $C_1>C_2$

$K_1<K_2$ ならば $C_1<C_2$

もし $K_1=K_2$ のときは、〈m_1〉および〈m_2〉について、見かけの複雑度は、

$m_1>m_2$ ならば $C_1>C_2$

$m_1<m_2$ ならば $C_1<C_2$　〔判別式〕

右によって返り点の複雑度を比較し、複雑度が低いほうを正解、高いほうを不正解とすれば、大半について正誤の判定が可能となるはずだ。

六　返り点の複雑度3――実例への応用

では、既出の例文について、実際に返り点の複雑度を測定し（〔計算式・第三案〕）、さらに連読符号をも勘案して（〔計算式・第四案（概念形）〕）、その大小関係から正誤を判定してみよう（〔判別式〕）。

まずは「動詞＋目的語＋副詞句」構文である。

【正】孔子問フ二礼ヲ於φ老子ニ一

＊一二点が二つ付いているだけなので、$C_1=2(2-1)=2$

【誤】孔子問フレ礼ヲ二於φ老子ニ一

＊レ点が一つ、一二点が二つ付いているので、$C_2=2\times1+2(2-1)=4$

〈$C_1<C_2$〉なので、前者が【正】、後者が【誤】と判定できる。左の例もまったく同じ。

【正】我与フ二書ヲ於φ友人ニ一

【誤】我与フレ書ヲ二於φ友人ニ一

次は「動詞＋間接目的語＋直接目的語」構文である。これについても判定は容易だ。

【正】我与フ二彼ニ書ヲ一

＊一二点が二つ付いているだけなので、$C_1=2(2-1)=2$

【誤】我与フレ彼ニレ書ヲ

＊レ点が二つ付いているだけなので、$C_2=2\times2=4$

やはり〈$C_1<C_2$〉なので、前者が【正】、後者が【誤】と判定できる。

次の例も同じ。

【正】与フ二王ニ書ヲ一

【誤】与フレ王ニレ書ヲ

今度は連読符号が打ってある例である。

・三二‐省ス吾ガ身ヲ一

＊一二点が二つ、連読符号が一つ付いているので、$C_1=2(2-1)+1\times h=2+h$

・三タビ省ミル二吾ガ身ヲ一

＊一二点が二つ付いているだけなので、$C_2=2(2-1)=2$

これは〈$C_1=2+h$〉と〈$C_2=2$〉との比較であるから、見かけの複雑度は〈h〉の分だけ前者のほうが高いものの、返り点それ自体の複雑度は互いに等しい。すなわち、どちらの返り点も可能ということになる。

・奴二‐虜‐使ス之ヲ一

＊一二点が二つ、連読符号が二つ付いているので、$C_1=2(2-1)+2\times h=2+2h$

・奴虜トシテ使フレ之ヲ

＊レ点が一つ付いているだけなので、$C_2=2\times1=2$

これも〈$C_1=2+2h$〉と〈$C_2=2$〉との比較なので、見かけの複雑度は〈2h〉の分だけ前者のほうが高いが、やはり返り点そのものの複雑度は等しく、いずれの返り点も可である。

右の二つの比較例に見る「返り点の複雑度は等しいがゆえに、いずれの返り点も可」との考え方は、予想外に適用範囲が広く、何かと有効性を発揮するかもしれない。たとえば、『論語』冒頭の名高い一文「有朋自遠方来」がその例だ。これは「朋有り、遠方より来たる」とも「朋の遠方より来たる有り」とも訓読されるが、語法上・解釈上の優劣はいざ知らず、返り点の複雑度だけに注目してみれば——

・有レ朋自二遠方一来

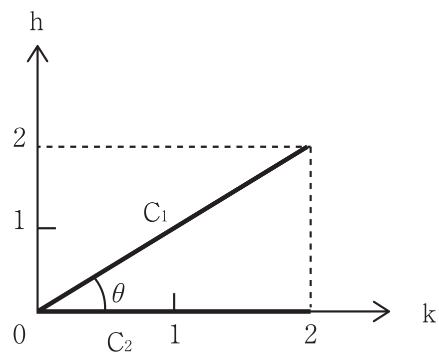
＊レ点が一つ、一二点が二つ付いているので、$C_1=2\times1+2(2-1)=4$

・有下朋自二遠方一来上

＊一二点が二つ、上下点が二つ付いているので、$C_2=2(2-1)+2(2-1)=4$

すなわち〈$C_1=C_2=4$〉となり、互いに返り点それ自体の複雑度は等しい。そのため、返り点に関するかぎり、両者とも可との結論が下されよう。一見、上下点まで用いている後者のほうが複雑そうだが、実は然らず。両者の複雑度は、まったく等価なのである。

ここで、返り点の複雑度を視覚化してみよう。前述のとおり、複素平面（いわゆるガウス平面）と同様に考えることが可能であるから、仮に複素平面における実数軸をｋ軸（返り点軸）、虚数軸をｈ軸（連読符号軸）とすれば、本質的複雑度も見かけの複雑度も、線分として返り点平面上に視覚化できる。右に挙げた「奴二虜-使之一」（$C_1=2+2h$）と「奴虜使レ之」（$C_2=2$）を例とすれば、前者は座標（2, 2）と原点を結ぶ線分、後者は座標（2, 0）と原点を結ぶ線分として書き表せよう。正の値のみを扱うので、座標平面としては第一象限だけで足りる。



〈C_1〉と〈C_2〉の本質的複雑度が等しいことは、ともにｋ座標の値が〈2〉であることによる。両者が等価であることは、〈C_1〉のｋ軸への垂直写像が〈C_2〉とまったく重なることによっても保証されよう。

連読符号のある〈C_1〉は、偏角 arg θ（〈argument〉が〈$\theta>0$〉となり、連読符号のない〈C_2〉は、〈$\theta=0$〉となる。また、見かけの複雑度は、〈C_1〉と〈C_2〉の絶対値の差によって表せるだろう。ピタゴラスの

定理により〈$|C_1|=\sqrt{8}$〉となり、〈$|C_2|=2$〉であるから、〈$\sqrt{8}-2 \fallingdotseq 0.83$〉が見かけの複雑度である。

このように、返り点の複雑度は、直交平面座標の第一象限で扱うことができる。加減の演算規則は、次のように定めておけばよいだろう。

〈$C_1=K_1+m_1h$〉および〈$C_2=K_2+m_2h$〉について、

加法は$C_3=C_1+C_2=(K_1+K_2)+(m_1+m_2)h$

減法は$C_4=C_1-C_2=(K_1-K_2)+(m_1-m_2)h$

乗除の演算規則をどのように定めるのかは未詳。そもそも当該二法の演算——果たして何を意味するのだろうか？——が必要か否かもわからない。

七　返り点の複雑度４——正誤判定の限界

ただし、第五節の末尾で「大半について正誤の判定が可能となるはずだ」と少しく薄暗い言い方をした理由も述べておかねばなるまい。それは、文章によっては、複雑度の低いほうが正解とならない場合もあるからだ。豈に図らんや、複雑度の高いほうが正解となってしまう場合もある。これは正直に断っておく必要があろう。複雑度を測定し、低いほうを選べば正解という正誤の判定法には、それなりの限界があることをわきまえておかねばなるまい。決して万能の方法ではないのである。私見によれば、少なくとも二つの場合を例外として扱わざるを得ないようだ。

第一は、「有N_1於N_2」構文の訓読である。有名な「有美玉於斯」（『論語』子罕）を例としてみよう。ただちに複雑度の計算も実行しておく。

【正】　有リ三美二‐玉於斯ニ一
　　＝斯（ここ）に美玉（びぎょく）有（あ）り

　＊$C_1=2(3-1)+1\times h=4+h$

【誤】　有リ二美玉於斯ニ一
　　＝美玉（びぎょく）斯（ここ）に有（あ）り

　＊$C_2=2(2-1)=2$

〈$C_1=4+h$〉と〈$C_2=2$〉では、明らかに〈$C_1>C_2$〉すなわち〈C_2〉のほうが値が低いが、実際の正解は〈C_1〉であり、〈C_2〉ではない。名詞「美玉」に返るのは不自然だとして**【正】**の返り点を誤りとし、**【誤】**の返り点こそ正しいとする向きもあるようだ[15]が、事の本質は、おそらく返り点の複雑度の高低にはなく、もっぱら「有N_1於N_2」構文と「N_1在N_2」構文との弁別にあるのだろう。訓読の原理から言えば、たしかに**【正】**こそ正解と考えて差し支えない[16]。

第二は、目的語から返って四字の動詞句を訓読するさい、四字を二字ずつ分割して訓ずる方式と、四字すべてを連読符号でつないでしまう方式に見られる複雑度の問題だ。前掲の例「三令五申之」を再び挙げてみれば、実のところ、これには二つの返り点方式が可能なのである。それぞれ計算式を添えておけば——

三令五申之　＝之（これ）に三令五申（さんれいごしん）す

ア　三二‐令五三‐申ス之ニ一

　＊$C_1=2(3-1)+2\times h=4+2h$

イ　三二‐令‐五‐申ス之ニ一

＊$C_2=2(2-1)+3\times h=2+3h$

一般にはアの方式を採るかと思うが、殊に史学・古文書学の方面ではイの方式もしばしば見かける。[17] 現状によるかぎり、両者とも正解としか言いようがない。つまり、〈$C_1=4+2h$〉と〈$C_2=2+3h$〉では、これまた〈C_2〉の値のほうが低いが、実際には、イは不正解だと主張するとしても、〈C_1〉でも正解、〈C_2〉でも正解なのである。たとえアこそ正解、右の例と同じく、複雑度の低いほうが【誤】、複雑度の高いほうが【正】となるため、またもや例外として扱わざるを得なくなる。

こうした例外を目にしていると、返り点の複雑度を測定すること自体が無意味のようにも思えてくる。むろん、ここまで用いてきた〔計算式・第三案〕〔計算式・第四案（概念形）〕および〔判別式〕に誤謬または欠陥がある可能性を否定するつもりはない。ただし、そもそも複雑度の測定を考察する契機となった「動詞＋間接目的語＋直接目的語」構文および「動詞＋目的語＋副詞句」構文における正誤の判定に有効なことだけはたしかである。

八　返り点の複雑度５――試論のまとめ

返り点の複雑度を測定することが、果たしてどこまで必要であり、また有効であるのかは、後考を俟つしかない。御関心のある向きが、有用な例文や有益な修正案を提供してくださることを衷心より望む。その便宜のためにも、本稿の試論において暫く使用した公理・原理・規定の類をまとめて掲げておこう。

〔公理１〕

返り点が一つもない文は、返り点の複雑度を0（ゼロ）とする。

〔公理２〕

返り点の複雑度は、0（ゼロ）または正（プラス）の値を取る。

〔等価原理１〕

AレB＝A二○B一

〔等価原理２〕

○二○○一＝○二○○○○○○○○一

〔等価原理３〕

○二‐○○三‐○○一＝○三○○二○○一

〔複雑度計算式〕　＊本稿中の〔計算式・第三案〕

$K=2r+2(R_1-1)+2(R_2-1)+2(R_3-1)+2(R_4-1)$

　　レ点項　一二点項　上下点項　甲乙点項　天地人点項

＊〈$r=0$〉または〈$R_n=0$〉のとき、レ点項〈$2r$〉および一二点項以下の〈$2(R_n-1)$〉は、それぞれ計算の対象とせず、ただちに当該項の値を0（ゼロ）とする。

〔複雑度表示〕　＊本稿中の〔計算式・第四案（概念形）〕

$C=K+mh$

＊〈K〉は右の〔複雑度計算式〕により算出された値。

＊〈m〉は連読符号（ハイフン）の個数。〈h〉は〈hyphen（ハイフン）〉の意。

＊〈h〉を虚数単位〈i〉に比定し、〈K〉を複素数の実数部、〈m〉を複素数の虚数部のごとく見なす。

〔複雑度判別式〕　＊本稿中の〔判別式〕

同一の文について、二種の返り点の複雑度が〈$C_1=K_1+m_1h$〉および〈$C_2=K_2+m_2h$〉と書き表されるとき、〈m_1〉および

〈m_2〉の値に拘わらず、

　$K_1>K_2$ ならば $C_1>C_2$

　$K_1<K_2$ ならば $C_1<C_2$

もし $K_1=K_2$ のときは、〈m_1〉および〈m_2〉について、見かけの複雑度は、

　$m_1>m_2$ ならば $C_1>C_2$

　$m_1<m_2$ ならば $C_1<C_2$

注

（1）『これならわかる返り点――入門から応用まで――』（新典社《新典社新書》25、平成二十一年）。

（2）「返り点をつかむ――先達が古典に対して発揮した知恵」／明星大学青梅校日本文化学部共同研究論集・第五輯『古典と先達』（［編集責任者］小堀桂一郎、明星大学日本文化学部、平成十四年）一二五～一三〇頁。

（3）注（1）所掲書四一～四七頁。

（4）原田種成『私の漢文講義』（大修館書店、平成七年）四二頁。

（5）簡野道明［編］『新修漢文入門（新制版）』（明治書院、昭和十二年）〔目次〕四・六頁／〔本文〕三七・七二頁。

（6）レ点を打つ位置については、湯城吉信・島野達雄「レ点はどの字に付くか？」（《形の文化研究》第四号、平成二十年六月）をも参照のこと。

（7）漢詩・漢文教材研究会［編］《漢詩・漢文解釈講座》別巻『訓読百科』（執筆者＝江連隆／昌平社、平成七年）一七一頁上～下。

（8）少なくとも現行の漢文訓読において、伝聞・推定の助動詞「なり」が独立した語として送り仮名に用いられた例を見かけたことはない。ただし、定型表現の一つ「聞説く」の「なら」は伝聞・推定の助動詞「なり」の未然形である。

（9）注（1）所掲書一六頁。漢文訓読の本質的原理を〈記憶術〉と規定することについては、拙稿「漢文訓読の〈割引率〉――記憶術としての定位」（明星大学紀要〈日本文化学部・言語文化学科〉第五号、平成九年三月）および「暗記できればまずはよし――〈漢文訓読＝記憶術〉論の検証」（明星大学青梅校日本文化学部共同研究論集・第一輯『普遍文明と民族文化――言語現象・造型表現・文明論の領域』（［編集責任者］小堀桂一郎、明星大学日本文化学部、平成十年）を参照のこと。

（10）東京都高等学校漢文教育研究会［編］『漢文提要』（昭和六十二年、新塔社）一二頁。

（11）中野清『中野式　漢文なるほど上達法』（ライオン社、平成十九年）三八～三九頁。

（12）注（1）所掲書一八頁。

（13）甲乙点は、その十干の後方に、さらに十二支が続いている可能性もあり、そうだとすれば、符号の数は合計二十二個になる。ただし、実際に用いるのは、せいぜい「甲・乙・丙・丁」くらいなもののため、実用上は十個と考えておいて差し支えない。この問題は、注（1）所掲書三五頁にも記した。詳しくは、注（2）所掲の拙文一一五頁および一五一頁の注（2）を参照のこと。

（14）注（1）所掲書三〇～三二頁。

（15）多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』（国書刊行会〔新版〕、平成十年）九七頁に、〈有二人於此一〉（人ココニ有リ）などと読む人もある」とある。ただし、不勉強にして不注意なためか、この「有二人於此一」（人　此に有り）流の返り点、すなわち「【誤】有二美玉於斯一（美玉斯に有り）」式の実例は未だ目にした記憶がない。

（16）注（9）所掲の拙稿で論じたとおり、漢文訓読の本質的原理は〈記憶術〉と規定できる。つまり、漢文訓読は、訓読文を暗誦することによって原文を暗記するという二重の過程を経る記憶術であり、最も肝腎な点は、暗誦した訓読文から原文を復元する復文作業にほかならない。もし「【誤】有二美玉於斯一」のように訓読して「美玉斯に有り」と暗誦すると、復文の結果が「美玉在レ斯」すなわち「N_1在N_2」構文となってしまう危険性が高くなる。それに比べると、「【正】有三美二玉於斯一」のごとく訓読して「斯に美玉有り」と暗誦しておくほうが、正しく原文「有三美二玉於斯一」すなわち「有N_1於N_2」構文に復元できる可能性が高い。むろん、「斯に美玉有り」が「斯有二美玉一」と復元されてしまう可能性もあるが、「美玉在レ斯」に比べればまだしも、というわけだ。【正】の訓読のほうが【誤】の訓読よりも原文の復元には有利なのである。つまり、「有N_1於N_2」構文と「N_1在N_2」構文との弁別が優先される結果、ここでは例外的に、返り点の複雑度の高いほうが【正】、低いほうが【誤】となるに違いない。

（17）一般にアの方式が採られるのは、例の明治四十五年（一九一二）三月二十九日付《官報》第八六三〇号所載「漢文教授ニ関スル調査報告」の〈返点法〉第三（九）に「欲四取二捨斟三酌之一」、（十）に「未五嘗不四嘆二息痛三恨於桓霊一也」と見えるからだろう（ただし、当該報告書の原文には連読符号ナシ）。『大漢和辞典』（大修館書店）すなわち〈諸橋大漢和〉や『広漢和辞典』（大修館書店）など、いわゆる漢文畑の執筆者による辞典その他は、この方式によるものが多い。けれども、たとえば宋希璟『老松堂日本行録』（村井章介〔校注〕、《岩波文庫》、平成十二年〔第三刷〕）に「収二蔵-愛-惜

之㆓」（二三九頁）あるいは「区㆓‐処‐分‐置倭人㆒」（二五九頁）とあるように、現にイの方式も通行している。これは事実として認めねばなるまい。注（7）所掲『訓読百科』一六八頁下⑥は、この三つの連読符号を連用して四字を連結するイの方式には一字たりとも言及せず、一六九頁下の⑥に関する解説でも、「返り点は、さすがに四文字までは引っぱれないから、二文字ずつに切って」云々と、アの方式についてのみ字句を費やしている。

それにしても、「さすがに四文字までは引っぱれないから」では、何が「さすがに」なのか読み手には皆目わからず、まったく説明として成り立たないだろう。同書は一六八頁下の⑤で、連読符号を二つ用いて三字を連結する例として「夫庸知㆔其年之先㆓‐後‐生於吾㆒乎」（夫(そ)れ庸(なん)ぞ其(そ)の年(とし)の吾(われ)より先後生(せんごせい)なるを知(し)らんや）を挙げている。もし「さすがに三文字でも引っぱれないでしょう」と言われたら、どうするつもりなのか。なぜ連読符号による連結が、三字までは許され、四字では許されないのかを説明しなければ（おそらく合理的に説明するのは無理だろうが）読み手は困惑するばかりだ。イの方式が存在する事実を無視した「さすがに」流の身勝手きわまる説明が平気で罷り通る――洵に憂慮に堪えない現状である。本誌の前号すなわち第二十号の拙稿で繰り返し言及した「有三年之愛於其父母乎」（其(そ)の父母(ふぼ)に三年(さんねん)の愛(あい)有(あ)るか／『論語』陽貨）について、「さすがに」流ではどのような返り点を打つのだろうか。「之愛」が熟語でない以上、「有ル㆕三㆓‐年之ノ㆔愛於其父母ニ㆒乎」では、さすがに奇妙な印象を免れないと思うのだが。